特別講演2：東アジアの中で百済寺院をどのように見るか

―百済王興寺と日本飛鳥寺の比較を中心に―

東国大学校文化財学科副教授
李 炳鎬（イ・ビョンホ）

日本最初の本格的な伽藍である飛鳥寺は、飛鳥文化を象徴する記念碑的な建造物である。飛鳥文化は大陸から仏教を受容したことによって生まれたものであり、明治の文明開化とも比較される革新的な出来事だった。一九五六～一九五七年には飛鳥寺の発掘が行われ、建築址と伽藍配置、舎利荘厳具、軒丸瓦などが百済寺院と類似していることが確認されたが、完全な一致は見られなかった。

最近の調査では、扶余や益山に残る定林寺址など約三十ヶ所の百済寺院址から重要な遺物が発見された。王興寺址では飛鳥寺より十年早く寺院が建立されたという銘文が見つかり、王興寺が飛鳥寺のモデルである可能性が提起されている。飛鳥寺の建築には、百済から国家次元で派遣されたさまざまな分野の技術者が携わっており、版築技法や瓦建物の基壇築造方法などは百済の影響と思われる。一方、飛鳥寺の伽藍配置は一塔三金堂式伽藍配置をとっており百済寺院とは異なる。このような三金堂配置は高句麗でのみ確認されているが、日本で初めて寺院を造営しながら、百済や高句麗から選択的に技術を取り入れる余力はなかったのではないか。そのため、百済が高句麗の影響を受け、それが再び日本に伝えられたと考えるのが自然だろう。

また、飛鳥寺の木塔心礎埋納品と呼ばれる遺物は小札甲（挂甲）、馬具、耳環などの品目と、金、銀小粒や延板、真珠母などの品目に分かれるが、百済の王興寺址、弥勒寺址の舎利荘厳具と比較してみると、その埋納方法や副葬品などに共通点が見つかり、百済との文化的なつながりを示唆している。中国南北朝時代の木塔址や百済、高句麗、日本の舎利安置方法には共通点がより多く、これはインドを起源とする仏教の普遍性に起因すると考えられる。

飛鳥寺と王興寺は共通点が多く、百済と日本の仏教文化の交流について新たな理解を助けるものである。今後は、仏教が持つ普遍性を土台に、東アジア各国の政治的・社会的・文化的背景をはじめとする多様な変奏がどのように相互作用していったのか、把握する能力が求められる。

プロフィール

●韓国教育大学校歴史教育学科卒業。ソウル大学校大学院国史学科修士課程修了。早稲田大学にて博士号を取得。国立弥勒寺博物館館長、国立中央博物館展示課長、国立公州教育大学校教授を経て、現職。著書に『百済仏教寺院の成立と展開』（社会評論、ソウル、二〇一四）、『百済寺院の展開と古代日本』（塙書房、二〇一五）など。韓国の古都、仏教寺院、瓦に関する論文も多い。